妖幻抄―１章―

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖幻抄―１章―

【Ｎコード】
Ｎ０８３５Ａ

【作者名】
維月十夜

【あらすじ】
近未来、２５００年。すべての文明は滅び去り、闇に没していた。世界は、大いなる犠牲を礎として、新たな変革を迎えようとしていた。今となっては、人間に代わって、妖（あやかし）とよばれる者が世界を支配していて！？

1章：強気な獲物

近未来、西暦２５００年。
すべての文明は、ことごとく滅び去り、闇に没していた。
大規模な地震が、大陸を引き裂き、各大陸は、一夜のうちに、海の底深くに、沈んでいったのだった。
世界は、大いなる犠牲を礎(いしずえ)として、新たな変革を迎えようとしていた。
現代文明が滅び、５００年。
今となっては、人間に代わり『アヤカシ』とよばれる者が、世界を、支配するようになっていた。
アヤカシ――- そう、妖(あやかし)は、人知が及ぶ以前より存在し、棲みたる者であった。

「おい、今度はどこ行きやがった！？」
「さあな、三匹バラバラに逃げたからなぁ」
崖の先、二人の男が、各々の得物を片手に、眼下に広がる広大な森を、見下ろしていた。
風が、吹く。
二人の金髪が、鮮やかに閃いた。
金髪をした彼らは、人間と、よく似ているが、決して、人間ではない。
彼らは、妖だった。
「いたぞ――っ！三匹一緒だっ、急げ！？」
仲間の発した号令に、いち早く反応したのは、二人のうちで、短髪の少年の方だった。
「ほらっ、早く行くぞ！また逃げられちまうっ」
「落ちつけよ、ヒサメ…大丈夫だ、集団で攻めれば、ひとたまりもねぇさ」

「まあ、そりゃな」

「父さんっ！母さん！？」

茂みの中、少女が、自分を庇って倒れた両親に、不毛な呼びかけをくり返していた。

ふと、彼女は動きを止める。

彼女は、近づく足音に息を潜め、音を立てないようにして、木に登った。

「見ろよ氷雨、年とった雄と、雌だ。大猟じゃねぇか」

嬉しそうに、仲間と話しながら、氷雨は、獲物に深々と刺さった、矢を引き抜く。

彼らが追っていたのは、人間だった！

木に登った少女は、息を殺して、彼らを見ていた。

（妖め、おのれっ…よくも、父さんと母さんを！許さない、許さない…っ！）

「はあ、そろそろ…戻るとするか。結構、いい狩りだったしな」

仲間の一人が言い、そうだな、と話し合っている中、氷雨は、一人で木に登り始めた。

「おい氷雨、なーにしてんだよ！猿（ましら）にでもなったつもりかよ？」

からかう友人に、氷雨は舌を出してから、頭を引っ込めた。

「なんだ、あいつ？」

「さあ？」

1章：強気な獲物・明（あかる）（前書き）

敵である氷雨に捕まってしまった明（あかる）。
彼女は、死をも恐れぬ、強い心を持っていた。

1章：強気な獲物・明（あかる）

「まだいるじゃねぇか、へぇ…若い雌か、いい拾いモンしたぜ、よくもこんなとこ登ったな、なかなか頭がいいようだが…運が悪かったな」
氷雨は、手に走った痛みに、一瞬、手を引っ込めた。
噛まれたのだ。
「ってぇ…」
「あたしに触るなっ、化け物！」
「化け物、ねぇ…」
氷雨は、ひょい、と片眉を上げた。
「よくも！父さんと、母さんを殺したな！許さないよっ」
「まあ、とにかく…あんたは俺に捕まった。ここから落ちて、死にたくなけりゃ…俺と来ることだな」
構える少女を、鼻で嗤って、氷雨は言った。
「なにすン…きゃっ！放せッ、放せぇ！また、噛みつくぞっ」
軽々と小脇に抱えられ、騒ぎたてる彼女を尻目に、氷雨は、内心驚いていた。
（こいつ、話せるのか！？人間風情と侮っていたが…面白い、気に入ったぜ）
大木の幹から、数メートル先の地面に、着地した氷雨に、仲間たちは群がった。
「氷雨えっ、そいつ、どうしたんだよ！？」
「珍しいだろ？生きた、若い雌だ…俺が見つけたんだ、貰うぜ？」
「チッ！やーれやれっ」
「仕方ねぇよ、それが掟だ。ところで、その雌…どうするんだ？喰い殺すのか？」
「さあな、好きにするさ」
「あ、そ」ぷい、とそっぽを向く彼の相棒。

「さぁて、帰るぞー」
氷雨が、彼女を荷物のように担ぎ、氷雨の仲間が、彼女の両親を担いだ。

彼らは、山に分け入り、獣道をかけあがった。
少女は、何度も、舌を噛みそうになりながら、氷雨にしがみついていた。
「どこ、行くんだっ！放せっ、放、せぇっ！」
「元気いいなぁ、あんまり吼えると、舌噛むぜ？」
「あ、んたっ、こ、殺してやるっ！」
「はっ、そうかい」
ひどい揺れが、治まると同時に、突然、目の前の景色が変わった。
山の、奥の方が広く拓け、草葺きの屋根が、続いていた。
年寄りがいて、女子供がいる。
「きゃっ！？」
少女は、急に背中から落とされ、氷雨を睨んだ。
「ふん、いい目だ…」
氷雨の周りに、男たちが集まってきて、珍しそうに、少女を覗き込む。
「氷雨ぇ、どうしたんだ、こんなの…珍しいじゃねぇか」
「いい毛並みしてんなぁ…ペットにでもするんか？」
男の一人が、彼女の、深紅の髪を触って言った。
「触るなっ！許さないッ、よくも、よくも父さんと、母さんを殺したなァっ！」
喋った、と驚く野次馬たち。
「おっとっ！さすが、野生動物だぜ、なぁ氷雨…こいつ、殺すの惜しくないか？珍種っぽいし」
「そうらしいな…とにかく、これ運ぼうぜ？邪魔くさくてかなわん」
氷雨は、足先で、獲物の背中をつついていった。
「ほら、まだ仕事終わってねぇぞ！しっかり歩けっ」

氷雨の、隣にいた少年が、仲間に、ねぎらいの言葉をかける。
「喰うのかっ、二人を」
少女は、氷雨の背中に、話しかけた。
「ああ…そうだ。俺たちにとって、人間なんぞは、狩りの獲物でしかない」
「あっ、あたしも、殺すなら、殺せっ！どうせ、生き延びたって、いつかは死ぬんだから！…生き延びたって、行くところも、なにもないんだ」
少女は、わめき散らす。
しかし、その先を言おうとした、彼女の口を、氷雨は塞いだ。
「お前は殺さない、黙って、俺についてこい」
「……」
彼女は、上目づかいに氷雨を睨むと、やがて、諦めたように俯いた。

「ついてこい、こっちだ」
村の中を、氷雨に連れられて歩く彼女に、好奇の視線が集まる。
「見てる…」
「…お前、変わってンな。俺が、怖くないのか？」
心底、不思議そうに言う氷雨。
「怖くない…死なんて恐れてたら、命がいくらあっても、足りやしないだろう」
「強いな、お前は…そして、美しい。俺ぁ、強い女が好きだ…名を聞こうか」
「あたしは、明（あかる）よ！」
「明か、なかなか、いい名じゃないか。よし、明…今からお前、俺のペットだ」
「お前、なんで…あたしを殺さない」
一歩退いて、なおも、睨みつける明に、氷雨はニヤリとした。
「もったいねぇって、思っただけだ…お前は、珍しいからな」
氷雨は、村はずれの高台にある小屋に、明を案内した。

「明…今日から、ここで暮らすんだ、いいな？」
「お前が連れてきたんだ、好きにすればいい」
つん、とそっぽを向く明。
「そうか、決まりだな」
「ふんっ」
（お前なんか、隙を見つけて、殺してやるっ！？）
日が、暮れていく。
洞（あな）で、眠っていた妖たちが、うごめき始める頃だ。
溶けて、形すら留めない、ビル山の向こうに、夕陽は沈んでいったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0835a/

妖幻抄―１章―

2010年10月10日07時46分発行